

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.126 April, 2015

目次

〈2014年度をふりかえって〉

CAPS 所長（法学部教授）李 静和 ……………1

〈アジア太平洋研究センター（CAPS）からのお知らせ〉 ……2

〈CAPS 主催企画の報告〉

井田進也・宮村治雄先生ワークショップ「アジアの思想を読む—中江兆民を中心に—」

明治大学政治経済学部専任講師 相原 耕作 ……3

第3回映画上映会報告「外泊」

CAPS 主任研究員 田浪 亜央江 ……………4

〈共同研究プロジェクト紹介〉

「ネイションと文学」

文学部教授 庄司 宏子 ……………5

「ライフコースの国際比較研究：多様性と不平等への社会的アプローチ」

CAPS 特別研究員 大崎 裕子 ……………6

〈書評〉

岩井俊憲著 『マンガでやさしくわかるアドラー心理学』（日本能率協会マネジメントセンター）

理工学部准教授 鈴木 誠一 ……………7

〈CAPS 研究員 研究内容紹介〉

中国の改革開放と人の移動

CAPS 客員研究員 趙 貴花 ……………8

〈2015年度 研究プロジェクト一覧〉 ……………9

〈アジア太平洋研究センター（CAPS）活動報告〉 ……10

2014年度をふりかえって



思い返せばあっという間に一年が過ぎました。新年度を迎えるにあたり、まず昨年度の一年にCAPSが主催した企画を簡単に振り返ってみたいと思います。

2014年度最初の公開企画として、6月には宇宙物理学者の池内了先生をお招きして公開講演会「3・11から未来を創造する」を開催し、200名を超える学生・市民の方に参加いただきました。また「連続ドキュメンタリー上映会」を開始し、6月にパレスチナを舞台としたドキュメンタリー「自由と壁とヒップホップ」、7月には中国のドキュメンタリー「長江に生きる ～兼愛の物語」の上映を行ないました。後者の上映会では中国から馮 艶 監督をお招きし、熱のこもったトークを

して頂きました。7月はほかにも、セミクロズドのワークショップ「女性の表現と政治 アジア、そして記憶するたましい」、および特別セミナーとして「アジア系アメリカ人をめぐる教育言説：『タイガー・マザー』を中心に」を開催しました。夏休みをはさみ、10月1日には特別講演会「マーティン・ヒル『分水嶺』」、さらに18日・19日には連続企画「越境・表現・アイデンティティ——アラブ文学との対話」を開催しました。初日はパレスチナのムハンマド・ハッシャーン氏をお招きし「パレスチナ難民のオーラルヒストリーを聴く」と題する講演会を、2日目にはサミュエル・シモン氏（イラク／英国）モナ・プリンス氏（エジプト）ラウイ・ハージ氏（レバノン／カナダ）を迎え、シンポジウムを行なうという多彩な内容となりました。新年を迎え、1月には3回目となるドキュメンタリー上映会（「外泊」）、さらに2月には井田進也先生（大妻女子大学名誉教授）と宮村治雄先生（成蹊大学学部教授）をお招きし、ワークショップ「アジアの思想を読む—中江兆民を中心に—」を行ないました（報告は本号3頁～5頁）。

また、招聘外国人研究員による研究成果報告としては、拡大研究会「中国元の自由交換性と中国の成長見通し」（4月21日）および公開シンポジウム「アジア地域における中国のリーダーシップ

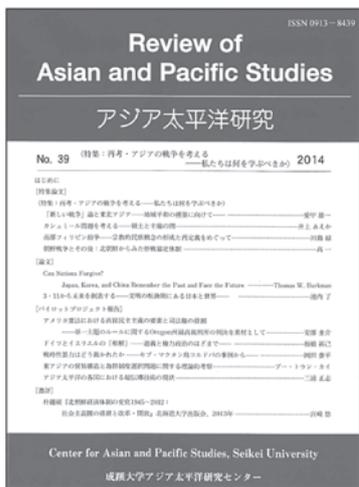
のこれから：ヨーロッパの視点からビジネスの展開と制度構築を展望する」(11月5日)を実施しています。もちろんこうした企画と平行して、各研究プロジェクトが取り組まれており、これらの成果は「CAPS叢書」のかたちで、またはジャーナル『アジア太平洋研究』誌上で順次公開されます。1月15日に刊行されましたジャーナル『アジア太平洋研究』39号には、2012年度までのパイロットプロジェクトの成果が、論文のかたちで

収録されています。

このように多彩な企画実施と研究活動は、多くの方々のご支援とご協力、そして幅広い層からの関心によって支えられて来ました。年度の変わり目にあたり改めてそのことを確認しながら、新たな気持ちで再スタートを迎えたいと思います。本年度もどうぞよろしく願いいたします。
(CAPS所長 李 静和／主任研究員 田浪 亜央江)

〈アジア太平洋研究センター (CAPS) からのお知らせ〉

**センター紀要『アジア太平洋研究』39号および
センター主催シンポジウム報告集が刊行されました**



アジア太平洋研究センターが年に一度刊行している紀要『アジア太平洋研究』39号が刊行されました(目次は下記)。センターなどで配布しておりますので、ぜひお手に取り下さい。

また、2014年10月に開催しました連続企画「越境・表現・アイデンティティ アラブ文学との対話」の記録報告書もこのたび刊行されました。アラブの現代作家たちのメッセージを日本語で味わって頂けます。

= 『アジア太平洋研究』39号目次 =

[特集論文：再考・アジアの戦争を考える]

「新しい戦争」論と東北アジア(愛甲雄一)／カシュミール問題を考える／南部フィリピン紛争(川嶋 緑)／朝鮮戦争とその後(高一)

[論文]

Can Nations Forgive? (Thomas W. Burkman)／3・11から未来を創造する(池内了)

[パイロットプロジェクト報告]

アメリカ憲法における直接民主主義の要素と司法権の役割(安部圭介)／ドイツとイスラエルの「和解」(板橋拓己)／戦時性暴力はどう裁かれたか(岡田泰平)／東アジアの貿易構造と為替制度選択問題に関する理論的考察(プー・トゥン・カイ)／アジア太平洋の各国における超伝導技術の現状(三浦正志)

[書評]

朴鍾碩『北朝鮮経済体制の変化1945～2012』(宮崎悠)

※紙面の都合上、各論文のサブタイトルは省略させて頂きました。



CAPS 主催企画の報告

井田進也・宮村治雄先生ワークショップ「アジアの思想を読む—中江兆民を中心に—」

明治大学政治経済学部専任講師 相原 耕作

2015年2月22日(日)、成蹊大学10号館2階大会議室において、成蹊大学アジア太平洋研究センター主催・思想史研究会後援のワークショップ「アジアの思想を読む—中江兆民を中心に—」が、井田進也先生(大妻女子大学名誉教授)と宮村治雄先生(成蹊大学法学部教授)を招いて開催された。中江兆民研究を飛躍的に発展させた両先生の登場とあって、会場は一杯になった。午後2時、アジア太平洋研究センター所長の李静和先生の挨拶に続き、山田央子先生(青山学院大学教授)の司会・進行の下、ワークショップが始まった。第一部は、宮村先生の報告「『経綸』と『理学』の間—中

江兆民『三酔人経綸問答』を読む」、第二部は、井田先生と宮村先生の対話「中江兆民を語る」である。

宮村先生の報告では、「経綸」(政治論)と「理学」(philosophy)という兆民の著作の二つの系譜の関連が、『三酔人経綸問答』(1887年)に沿って考察された。『民約訳解』(1882-83年)と『三酔人経綸問答』は「経綸」に属するが、普遍的な理想を相対的な政治の世界で貫こうとする態度を「狂戇」として退ける前者とは対照的に、後者では、普遍的な理想論を説く洋学紳士を「狂」であると東洋豪傑が問い詰めるところから「問答」が始まる。異なる二つの「経綸」の間には「理学」の世界があり、「理学」は、同じ事柄も異なる方向から解釈できることを示していた。この観点から、兆民は、対立する立場の間の「問答」という方法を採用して、『三酔人経綸問答』を書いたのだという。そして、三酔人それぞれの「経綸」の根拠が「理学」の立場と重ね合わせられる。洋学紳士は「理義」(raison)、東洋



豪傑は「行為の旨趣」(motif des actions)、南海先生は「意欲」(volonté)の立場である。カントが完成させた「理義」の立場に対し、「行為の旨趣」の立場は、カントの道徳的立場も「利己ノ一念」という動機に基礎づけられているとする。そして、「理義」がそのまま政治の世界で通用する訳ではないとする南海先生の立場は、ルソー『社会契約論』の「法」の論理と合致する。「衆意欲」によって選び取るのが「法」であり、人々の相互性の中で「理義」も選択されるのである。その意味では、「恩賜の民権」を「恢復の民権」に近づけてゆくのではなく、性急に「恢復の民権」を求めた第一議会の兆民は「狂」であるが、これは「君主の専制」ならぬ「国会の専制」への批判と考えることもできる。

宮村先生の1時間半に及ぶ大報告の後、参加者との間で質疑応答が行われた。『三酔人経綸問答』を「理学」と関連づける宮村先生の画期的な読みには、驚嘆の声も挙がった。

第二部では、井田先生が、自ら調査・収集した貴重な資料をパワーポイントで紹介しつつ話題を提供し、宮村先生が応答し、参加者を交えた討論も行われた。井



田先生は、まず、フランス留学時代の兆民について、パリ、リヨン、マルセイユにおける現地調査に基づいて紹介した。当時は第二帝政崩壊から第三共和政確立へ至る過渡期であり、兆民はリヨンで生きたナマの共和派を見たのではないかと井田先生は指摘された。ついで井田先生は、兆民の土佐藩校時代の先生である奥宮慥齋について紹介した。「奥宮文庫」の「多口子伝」(明治8年)という草稿は、中江兆民が書いた奥宮慥齋先生の伝記であるという新発見が披露された。また、奥宮慥齋の日記に

は兆民との交流などについても書かれており、奥宮健齋は兆民の学問の方法などにも影響を与えたと考えられるという。

宮村先生の応答で印象に残ったのは、既習からの「擺脫」「蟬脱」という兆民の学問の方法である。セミが殻を破るように、絶えざる自己超越を行うことが重要なのだという。さらにその後の討論では、兆民の難解な文体は、読者を「君子」として扱い、対等な議論を目指すもので、易しい言葉で真理を外から注入することを拒絶したのだと指摘された。

開会から5時間近くたっても終わるのが惜しまれるほど充実したワークショップとなり、その後の懇親会でも議論は続いた。井田先生、宮村先生、兆民先生の「三酔人」による「問答」に導かれ、参加者は新たな知的世界が開けてくる場に立ち会うことができた。

*執筆に際し大久保健晴氏（慶應義塾大学准教授）の協力を得た。記して感謝する。文責は全て相原にある。

第3回映画上映会報告「外泊」

アジア太平洋研究センター 主任研究員 田浪 亜央江

年明け間もない1月15日、2014年度では3回目となる連続ドキュメンタリー映画上映会として、韓国のドキュメンタリー作品「外泊」の上映と、来日中のキムミレ監督によるトークが行われた。

一言で言えば、この作品は韓国での女性の労働争議の様子を記録したものだ。2007年、韓国で「非正規職保護法」が施行される直前、ワールドカップ競技場にある大型スーパーを経営するイーランドグループが、パートを全員解雇してレジ係を外部委託することを発表した。それに対抗して500人のパートの女性たちがレジのカウンターに座り込みを始めたのだ。

「外泊」というタイトルと労働争議の記録という内容とのあいだに「ズレ」を感じ、不思議な感覚を抱く人もいるのではないだろうか。「外泊」

とは、形式的にはストの場での「泊り込み」を指すのだが、結果的に家庭において家事労働を一手に担う妻や母としての役割から解放される経験を味わい、女性たちが自分の生き方を考えてゆくようになる成長のプロセスである。ストを行なう女性たちがめいめい食料を持ち寄り調理し、歌ったり踊ったりとさまざまなかたちで思いを外に出そうとする、その表現のかたちが面白い。

上映後のトークでキムミレ監督はまず、韓国の女性たちは強いが、社会としては家父長制が強いため男性が稼ぎ主であると考えられており、そのため労働運動の担い手の中心はずっと男性だったと指摘した。1997～98年のアジア通貨危機による

韓国経済の大混乱の時期にはまず女性が解雇され、再雇用された場合は以前より低賃金になったが、それでも労働運動の中で女性雇用の問題はあまり注目されなかったという。ところが2007年、勤続2年後には非正規を正規職に切り替えるという「非正規保護法」が出来たために、かえって非正規や契約職が大量解雇されるという事態が起きた。ここで女性たちが多人数で団結し、しかも長期間にわたって抗議運動を続けるというほとんど初めての状況が生まれたのだ。それまで男性中心の労働運動について記録を撮るなかで「運動のなかでの女性の排除」の問題にすでに気づいていたキムミレ監督は、その後はずっと彼女たちの運動を追って行くことになったという。ストライキは結果的に、500日以上続くものとなった。

会場からも多くの感想や質問が寄せられた。ある学生は、「自分は自立した、ピンと立った女性になることを目指している。作品に出てくる女性たちが生き生きしており、警察に嫌がらせをされてもたたかっている姿がかっこよかった。…自分は創作が好きで、それを通じて世界を変えたいと思っているので、とても勇気づけられた」という発言をした。また「女性がパンソリなど歌謡の伝統を引き継ぎ、歌を通して訴える姿が、文学的で格好よいと思った」という感想、そして「日本でもそれまで女性中心の非正規雇用が男性にも広がり、労働の女性化ということが指摘されているが、韓国もまったく同じだ



ということがよく分かった」という感想もあった。質問として、正規化を要求するというより、非正規のまま労働の権利を守ろうとする新しい要求はあるのかと問われると、キムミレ監督の答えは、映画撮影当時はまだしも正規職化を要求することが出来たが、現在ではますます環境が厳しくなり、(新しい主張や運動の方向性というよりは)正規職の要求をすることでないというのが現状だ、というものであった。朴槿恵政権下での状況の悪化のため、無力になっている、ともいう。非正規雇用問題に先

が見えない状況は、日本もまったく他人事ではない。

確かに韓国と日本の労働環境や労働運動をめぐる状況はひじょうに似ており、どちらがマシとかどちらが酷い、といった比較で済ませるのではないだろう。伝統的な家父長制の上に、グローバル化のなかでの産業構造の転換などが生じており、構造的な問題のなかで生まれている共通課題として考える必要がある。そうであるなら、そのなかでの抵抗のあり方もまた、互いに参照し合えることがたくさんあるはずだし、それこそが現在必要なことだと痛感した。

共同研究プロジェクト紹介

「ネーションと文学」

文学部教授 庄司 宏子

「ネーション」とは18世紀から19世紀にかけてヨーロッパで成立する、単一の言語、文化、歴史をもつ国民からなる統治機構と理解されています。ネーションの単一性のなかには、「民族(=nation)」も含まれますが、国家としてのネーションは、その統治下にある多民族・多人種からなる異質な集団を文化的に均質化する政策を推進しながら、「国民」という一体感を創り出す近代のシステムといえます。2014年度から始まったアジア太平洋研究センターの共同研究プロジェクト「ネーションと文学」は、ヨーロッパ近代に生まれ、その後世界的に拡大したネーションというシステムと文学との関係を考え、21世紀のグローバル化や新たな帝国論の時代にあって、変容しつつもなお存続するネーションの今日的姿を捉えることを目的としています。

先に述べた国民としての「一体感」とは同じ国土に生き、同じ言葉話し、同じ歴史の記憶をもつ、といったことから創り出されます。そうした「一体感」を演出する役割を担うものがメディア、特に広く大衆に向けて発信されるマスメディアです。マスメディアというとテレビ、新聞、それにインターネットなどが思い浮かびますが、19世紀にはテレビやインターネットはないので(インターネット的なものへの想像力がありますが)、電信、雑誌、広告、絵画、音楽、パノラマ、博覧会、それに文学もそうしたメディアの役割を担っていました。ラジオもまた20世紀の前半には大きな役割を果たしています。テレビとラジオを比較すると「一体感」の創出では後者が優れているといわれます。ある学者は「テレビは人々を分断するが、ラジオは結束させる」と言っています。以前あるアナウンサーが、テレビとラジ

オでは呼びかけの対象が異なる、テレビでは「お茶の間(もはや言葉のなかにしか存在しない空間かもしれない)の皆さん」だが、ラジオは「あなた(二人称単数)」でなくてはならない、と言っていました。それはラジオの特性をよく伝えていました。

文学には、さまざまな形で「ネーション」の姿が刻印されています。例えば、私が専門とする19世紀アメリカ文学には、この時代のアメリカを支える一大産業であった捕鯨業が登場し(もちろん文学では捕鯨業=ネーションなどと単純な形で描かれることはありませんが)、敷設の当初、人々がいかに鉄道に驚愕したかといったことが描かれています(広大なアメリカで鉄道を走らせることは、時刻表の整備、すなわち同じ時間のゾーンをつくり、鉄道で繋がれた「国土」のイメージを形成するという「ネーション」の成立と関わります)。またネーションを支える同じ民族(単一民族)という意識、アメリカの場合それはアメリカ先住民や黒人の存在を抑圧して「白人国家」として形成されるわけですが、そうした人種意識とネーションの形成への関与や抵抗といったことも文学から読み取ることができます。

文学から「ネーション」を読み解くことは、それが私たちの生活意識にいかにか深く根づいているかを知らせてくれますが、従来の「ネーション」の捉え方には問題点もあります。それはネーションに先立って世界的に広がり、アメリカやヨーロッパに富をもたらした、ネーション形成の経済的、政治的基盤となった「植民地」の問題が等閑視されていることです。15世紀末からの大航海時代(人、モノ、情報、動植物、言葉などが新大陸と旧大陸で移動するグローバル化時代の先駆けです)以降、西半球(南

北アメリカとカリブ海)には続々とヨーロッパの植民地ができます。そのなかで資本主義と植民地主義がつくり出されます。植民地の統治法にはヨーロッパ各国で違いはありますが、スペイン、ポルトガル、フランス、イギリス、オランダといったヨーロッパ各国、それにアメリカは互いに共通点の多い植民地の歴史をもつこととなります。そうした植民地時代の記憶が今も揺曳しているのがカリブ海地域です。こうした植民地の記憶も文学言語には刻まれていて、国境のない文学言語には、さまざまな国や地域、人々の言葉が交錯しています。こう考えると、単一性を志向する「ネイション」とは、人間の想像力を制限するのみならず、文学研究のありかたもまた制限するものであったことがわかります。そうした批評意識から研究プロジェクトでは、英語圏文学だけではなく、フランス語圏、日本文学の研究

者が集い、ネイションを横断的に論じています。

「ネイション」は21世紀の現在も姿をかえつつ存続しています。広大な土地を擁するアメリカでは、ある地域に行くと英語を一生話さなくても生活できる町が諸処にあります。インターネットのなかに形成される「ブラック・ネイション」、「ムラトリー・ネイション」というものもあります。それらはアメリカのなかにある小さなネイションです。また昨今では「イスラミックステート (IS)」もあります。こうしたネイションもどきの形成は、従来のネイションの規定(領土をもち、主権としての国民がいて、国際的に認知されていること)を超えています。こうした組織を生み出してしまう現代とは何なのかについても、研究プロジェクトでは視野に入れていきたいと思っています。

ライフコースの国際比較研究：多様性と不平等への社会学的アプローチ

CAPS 特別研究員 大崎 裕子

本プロジェクトでは、現代社会において人びとのライフコースがどのように多様化し、同時に不平等化しているのかを、国際比較によって社会的に解明することを目的としている。近代産業社会では、「どのように人生を歩むのか」というライフコースがおおむね標準化されてきた。たとえば日本社会では、男性は学校卒業後正社員として就職し、20～30代で結婚し子供をもち、60歳前後まで働くことが期待され、女性であれば20代に結婚し、退職して主婦となる。しかし社会が流動化しグローバル化するにつれ、そうした標準的ライフコースから逸脱するケースが発生している。その結果、転職や離婚が珍しくなくなり、非正社員とならざるをえない人が増え、少子化が進行しつつある。

これまではこうしたライフコースの多様化について、地域や国ごとの分析にとどまり、世界全体としてどのような方向に向かっているのかは未解明であった。とりわけアジア諸国や発展途上国のライフコースについては情報が整理されておらず、たとえ多様化にともない人びとの間に国内的、国際的な不平等化が進行していたとしても見過ごされてきた可能性がある。そこで本プロジェクトでは国際的にライフコースの多様化と不平等化がどのように進行しているのかについて、社会学的な手法をもちいて分析を進めている。

それではまず日本国内において、現在どのようなライフコースの実態があるだろうか。これまでの研究やデータによれば、現代の日本では、恋愛結婚化、未婚化、少子化が同時に進行し、恋愛を開始する際の「恋愛の壁」、恋愛から結婚への「結婚の壁」、結婚から出産への「出産の壁」があり、これらすべてを乗り越えた人だけが子どもをもつことができている。ところがこうした恋愛、結婚、出産の壁はすべての人に平等に立ちはだかるのではなく、ある社会階層の人には壁が低く、別の社会階層には高いといった「家族形成の社会的格差」が存在している可能性がある。こうした格差を対処せずに放っておけば、階層格差の再生産という問題が、家族形成を通してさらに拡大する恐れがある。

そこでプロジェクト1年目の取り組みとして、上記のような日本国内におけるライフコースの実態、とくに少子化につながるプロセスを実証的に解明すべく、既存データとこれまでの研究をもとに国内アンケート調査の設計、準備を進め、この3月に実査を完了した。アンケートでは、日本国内の20～69歳およそ2千人を対象とし、出生、教育、仕事、恋愛、結婚、地理的移動、退職、ライフスタイル、社会意識などを時系列で詳細に質問した。このように、人びとがどのように恋愛し、結婚し、出産するか、さらにそれぞれのイベント

時点でどういった仕事につき、どういった意識を持っているかを、1つのデータで統一的に収集することで、「恋愛の壁」、「結婚の壁」、「出産の壁」に関する社会的格差が生成される一連のメカニズムを明らかにすることが可能である。プロジェクト2年目にはこのデータを様々な統計分析により分析し、恋愛、結婚、出産をはじめとするライフスタイルの多様化と格差の関係、ライフコースにおける教育の役割の変化、ライフコースにおける主要イベントの時系列的発生パターンなどについ

て、実証的に明らかにする予定である。

今後の展開としては、上記のアンケート調査の量的分析以外に、インタビュー調査による人々のライフコースの意味づけに関する質的分析、および欧米諸国、アジア諸国、発展途上国のライフコースにかんするマクロデータの収集をおこない、これらを総合的に分析することで、最終的に、誰にどのような支援が必要か、とくに日本社会における経済的格差や少子化への処方箋を政策へとまとめて提言したいと考えている。

書評

岩井俊憲著 『マンガでやさしくわかるアドラー心理学』

(日本能率協会マネジメントセンター)

理工学部准教授 鈴木 誠一

アドラー心理学!この名前は最近時々耳にする。また新しい心理学かな?と置いていたら、ちょっと聞きかじったところでは、フロイトと同じぐらい古い…らしい。しかも誰でもすぐに幸せになれる…らしい。

さてさて、これで引かかったら怪しい宗教だ。でも疑い深いあなた、これからお話するのは、量子論にも通じる極めて理論的な話です。

紹介する本は「マンガでやさしくわかるアドラー心理学」。この本を正しく紹介するために、まずは今から2600年ほど前のネパールに飛んでみよう。ヒマラヤ山脈の麓、白い峰々から流れ落ちる水がガンガーに注ぐ緑の山裾、コーサラ国に生まれたシッダルタという若者が、生死の苦しみを乗り越え、人々を救うために、ある理論にたどり着いた。その理論とは「人間の認識は人間の基準に基づいている」というものだ。言われてみれば当たり前のことだが、そうだとすると客観的な認識をすることは不可能に近いぐらい難しいことになる。逆にもし全てのことを客観化できれば、自分の死さえも恐れる必要がなくなる。さて、この理論で死が怖くなくなった人はどのぐらいいるだろうか。多分0人?実際この理論を人に真に理解させることは困難で、シッダルタは誤解が起きないように理論を文章にはせず、直接人々に会い、例えを使って説明して歩いた。シッダルタの死後、本来の理論は途絶えた。しかし、一部の人たちが聞き取った教えを文に写し、後世に伝えた。こうして人類が生み出した最も客観的な理論の1つは、世界でも有数の巨大宗教に変貌していく。

次にこの客観理論が再発見されるまで、2000年以上の時を待たなければならない。

ときは流れ、今から90年ほど前。第一次世界大戦後の復興に湧くフランス、ヴィクトル・ピエール・レーモンは、シッダルタと同じように、人間の認識が主観的であるために間違った理解を生むことに気付いた。彼の理論によると、物体を単に固まりとして認識するのは間違いであり、現実には物体は波として振る舞っている。人が粒子としてしか認識できないにもかかわらず、波としての性質を持つ素粒子を量子と呼ぶ。今までの人の認識は真実を見てはいなかったのだ。しかし科学技術の進歩によって、物質を量子として考えないと説明できない事実がたくさん現れてきていた。ガリレイにも劣らぬ驚天動地の理論、にもかかわらず、今回は宗教に干渉されることはなかった。やがてこの理論はあやまらず量子力学へと発展していく。

この量子論の台頭とはほぼ同じ頃、敗戦後のオーストリア、ウィーンで1人の医師が人々を救うために奮闘していた。当時、フロイトが観察結果から演繹的に心理学を作り上げていったのに対し、その医師は人間の認識の主観性を認め、客



観的理論によって患者が幸せになれる道を探した。「人はいつでも幸せになれる」。なぜなら幸せには客観的基準がない。つまり幸せは主観的な尺度なので、心の持ちようで幸せはいつでも手に入れられる。この理論は正しくても、理解と実践はまた別の問題だ。医師は自分の治療経験を客観理論によって説明していった。そして人々の心を救うために、シッダルタのように直接人々に話しかける。おそらく誤解を避けるため、理論を文章にはしない。医師の名はアルフレッド・アドラー。こうしてアドラーの心理学は原典のない心理学として始まった。それは実践の理論であり、真実に誠実であろうとする努力の現れでもあった。

ちょっと聞きかじっただけでは新興宗教のように胡散臭い理論。しかしその裏には量子論に比する論理性が潜んでいる。これを正確に理解すること

はかなり困難だが、使いこなすことができればどれほどの価値があるのか、試してみたくならないだろうか？ 原典を持たないアドラー心理学は、今も多くの研究者の中で生きている。そしてまだまだ発展して行くのだろう。

今ではアドラーの理論を紹介する書籍は多い。しかし、読んでみると意外に大きな理論体系が埋もれている。これを最初から覚えて、理解することは難しそう。そんなとき、おいしいところを分かりやすく教えてくれるマンガは、なかなか良い方便なのかもしれない。マンガ本に1500円という値段は高い気もするが、実は本の中身はぎっしり詰まっている。新しい理論に挑戦したい人、人間関係に悩んでいる人、人生の方向性を見つけたい人、そしてちょっとトキメキを感じてみたい人、どうですか？ 読んだらきっと十分元が取れますよ。

CAPS 研究員 研究内容紹介

中国の改革開放と人の移動

CAPS 客員研究員 趙 貴花

中国では1978年に改革開放政策を提出し、実施を開始して以来、さまざまな面において著しい変化を遂げている。国内における計画経済体制から市場経済体制への転換、外国への門戸開放による外国の資本や技術の導入及び人材などの受け入れにより、国内経済の活性化を促進したことは、周知のとおりである。

しかし、改革開放は沿海地域を中心とする一部の都市や地域において実施してきたことから、そうした都市や地域に外国の企業や人びとおよび資本がますます集中している。それに伴い、中国における地域間の経済格差も徐々に現れ、就職の機会を求めて、農村から都市へ、小都市から大都市へ、内陸から沿海都市への人の移動が急激に増加しつつある。中国政府の『中国流動人口発展報告2010』によれば、2009年の中国の「移動人口は2.11億に達している」とされる⁽¹⁾。

また、中国は2010年に「世界2位の経済大国」になり、経済成長は国内における富裕層を生み出した。2011年の中国銀行プライベートバンクと胡潤研究院の共同発表によれば、1,000万元（2015年3月19日のレートで1億9,474万円）以上の投資資産を有している中国の富裕層の数は約50万人に達している。その中で国外資産を有している人が3分の1を占めるが、その国外資産の中の3分の1の国

外投資が移民を目的としている。また、約14%の富裕層はすでに移民しているが移民の申請を行っており、そのほかの約46%の富裕層は移民することを考えているとのことである⁽²⁾。彼らが国外へ移住する目的として挙げられているのは医療や食品、出入国の自由、安全な投資環境であり、最も重視しているのは子どもにより良い教育を与えることであった。中国においては、こうした文化的な要因による移動が、一種の新しいライフスタイルとして登場してきた。

中国内外へと移動する中国の人びとの中には、漢族だけでなく少数民族の人びとも含まれる。新華社の2010年9月15日の報告によれば、現在中国で毎年の移動する少数民族の人口は約1,000万人に達するとされる⁽³⁾。そうした少数民族の中でも近年活発な移動を行うことで注目されているのが中国の朝鮮族である。1980年代以降、とりわけ1990年代以降の中国の朝鮮族社会は劇的な変化を経験している。その最も大きな変化が人びとの移動である。1980年代にはまだ小規模の東北地域内、または国内の農村と都市間の移動が行われ、国外への移動はまだ少数にすぎなかった。けれども1990年代には、国内での移動も東北部に限らず、東南沿海部地域や大都市を目指した全国的な移動が大きく増加⁽⁴⁾すると同時に、韓国、日本、アメリカなどを

含めた幅広い地域へと活躍の場を広げている。

彼らは、これまで中国の東北3省（黒竜江省、吉林省、遼寧省）と内モンゴル地域に集住し、エスニック・アイデンティティを強固に保持してきた。その背景には子どもたちに中国の国家言語である中国語に加えて、朝鮮族のエスニックな言語である朝鮮語を教えるという二言語教育が重要な役割を果たしてきたと見られる。改革開放後の中国に突然に移動の自由が生じた時、彼らはその二重言語能力を武器に、率先して中国内外への移動を開始した。さらに、日本との歴史的な関係の中で、多くの若い朝鮮族たちは中等教育で外国語として日本語を習得することでさまざまな領域における日本との関わりも深まってきた。このような多言語習得によって、朝鮮族の東アジアにおける交流の最前線で活躍する機会が飛躍的に増加している。

筆者はこれまで日中韓3国における朝鮮族の移動と定住の実態、そして彼らのアイデンティティと子どもの教育について人類学的方法を用いて調査と考察を進めてきた。その中で、北京に移動した人びとは、子どもの教育において漢族社会への適応を目指す一方で、エスニック言語である朝鮮語の維持に努める活動も見られた。一方、ソウルではアイデンティティの葛藤や揺らぎが認められ、東京で

は多層的なアイデンティティの獲得と子どもの言語教育を戦略的に考えて実施していることが明らかとなった。また、彼らは移動先において新しいライフスタイルとそれを共有する開かれた都市空間を創造していることが分かった。

生れ育った地域を離れて移動する人びとの研究は、これまでは経済的観点からのものが多かったが、移動する人びと自身への密着した調査によって、彼ら自身が移動の目的をどう認識しているのかに注目してみると、そこには決して経済的領域に限定されるのではない新しい移動のあり方が見えてくる。朝鮮族の人びとの移動の実態と彼らの考えや文化創造を反映してきた筆者は、今後も彼らの動向に注目していきたい。

[注1] 中国政府網 2010年6月26日の記事「我が国移動人口は2.11億に達している 未来人口移動の4大情勢」

[注2] 財新網 2011年10月31日の記事「中国千万富豪はすでに移民あるいは移民しようとする 米国とカナダが一番人気」

[注3] 中国政府網 2010年9月16日の記事「我が国の少数民族の移動人口は、現在そのほとんどが都市へ移動し、アルバイトや商業を営んでいる」

[注4] 李鋼哲 2006「グローバル化時代の朝鮮族社会構図—重層的アプローチ—」中国朝鮮族研究会編『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク：「アジア人」としてのアイデンティティを求めて』アジア経済研究所 pp.3-19

(2015年度 研究プロジェクト一覧)

	責任者名	研究題目と目的	
共同研究プロジェクト	三年目	李 林静 法学部准教授 (継続)	近代中国の危機言語と言語政策研究 (期間: 2013.4.1 ~ 2016.3.31) 題目: 近代中国の危機言語と言語政策 目的: 中国の危機言語問題および言語政策の実態を解明し、それを通して、中国の近代文化と制度に対する理解を深めることを目的とする。
		下河辺 美知子 文学部教授 (継続)	合衆国における「労働」の文化表象研究 (期間: 2013.4.1 ~ 2016.3.31) 題目: 合衆国における「労働」の文化表象 目的: 1970年代以降、科学技術の進展や社会変化により労働の概念が拡大・変質したなか、古くて新しいさまざまな形の「労働」が、合衆国における文化表象においてどう扱われているかを探る。
	二年目	庄司 宏子 文学部教授 (継続)	ネイションと文学研究 (期間: 2014.4.1 ~ 2017.3.31) 題目: ネイションと文学—コロニアリズムとグローバリズムのなかで 目的: 近代の「ネイション」(国民国家)と文学との関わりを理論と歴史の両面から捉え、グローバリズムの現代における「ネイション」について考える。
		小林 盾 文学部教授 (継続)	ライフコースの国際比較研究 (期間: 2014.4.1 ~ 2017.3.31) 題目: ライフコースの国際比較研究: 多様性と不平等への社会学的アプローチ 目的: 現代社会において人びとのライフコースがどのように多様化し、同時に不平等化しているのかを、国際比較によって社会学的に解明する。
	一年目	森 雄一 文学部教授 (新規)	認知言語学の新領域開拓研究 (期間: 2015.4.1 ~ 2018.3.31) 題目: 認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として 目的: 英語・日本語・アジア諸語を中心に、従来は記述的・伝統的手法によって扱われてきた言語事実や隣接領域の進展により開拓されてきた言語事実を認知言語学的手法によって解明する。
		細谷 広美 文学部教授 (新規)	グローバル・ジャスティスの模索とローカリティ (期間: 2015.4.1 ~ 2018.3.31) 題目: グローバル・ジャスティスの模索とローカリティ: グローバルとローカルの出会い現場から 目的: グローバル化が進展するなかでのグローバル・ジャスティスの模索と、ローカルレベル及び特定集団の多様なジャスティスとの関係、ネゴシエーションのプロセス、ジャスティスが汎用化されるプロセスについて、現場から検討していく。
プロジェクト	湯山 トミ子 法学部教授 (新規)	子ども観の社会史的考察のための基礎研究 (期間: 2015.4.1 ~ 2016.3.31) 題目: 子ども観の社会史的考察のための基礎研究—日中子ども観の比較考察 目的: 子ども観の社会史的考察のための基礎研究として、日中子ども観について考察し異相性と近似性を析出し、東アジア儒教文化圏における子ども観の多様性、多層性を明らかにする。	

アジア太平洋研究センター (CAPS) 活動報告 (2014.12.1 ~ 2015.3.15)

公開講演会、研究会、研究出張などの記録

- ◇12月4日(木) センタープロジェクト海外出張(12月10日まで)
出張者:センター主任研究員・田浪亜央江
調査地:韓国
目的:講演および研究者との面会・打ち合わせ
- ◇2月1日(日) センタープロジェクト海外出張(2月15日まで)
出張者:センター主任研究員・田浪亜央江
調査地:イスラエル及びパレスチナ自治区
目的:インタビュー等のフィールド調査及び資料収集
- ◇2月2日(月) センタープロジェクト国内出張(2月3日まで)
出張者:文学部准教授・有富純也
調査地:九州国立博物館
目的:研究プロジェクトにかかる調査のため
- ◇2月24日(火) センタープロジェクト海外出張(3月1日まで)
出張者:理工学部助教授・井上元基
調査地:スペイン
目的:The Energy&Material Research Conference EMR2015
における成果発表のため
- ◇3月5日(木) センタープロジェクト海外出張(3月12日まで)
出張者:文学部准教授・権田健二
調査地:アメリカ合衆国
目的:資料調査のため
- ◇3月7日(土) 日韓比較メディア研究プロジェクト研究会開催、
18:30-20:00
テーマ:韓国代案言論メディアの理解に向けて
講師:森 類臣
場所:プラセリー・エディブル
出席者:7名
- ◇3月8日(日) センタープロジェクト国内出張(3月10日まで)
出張者:文学部教授・庄司宏子
調査地:同志社大学 今出川キャンパス
目的:同志社大学アメリカ研究図書館での資料閲覧のため
- ◇3月9日(月) センタープロジェクト海外出張(3月21日まで)
出張者:名誉教授 客員研究員・富田武
調査地:ロシア連邦
目的:シベリア抑留関係資料調査のため
- ◇3月12日(木) センタープロジェクト海外出張(3月17日まで)
出張者:文学部・奥野昌宏
調査地:韓国
目的:プロジェクト研究成果にかかる協議ならびに資料調査
のため
- ◇3月15日(日) プロジェクト研究会 15:00-17:30
テーマ:ネイションと文学(庄司プロジェクト)
講師:庄司 宏子
場所:成蹊大学10号館2階第一中会議室
出席者:7名
- ◇3月20日(金) 海外出張(3月26日まで)
出張者:文学部英米文学科准教授 小林英里
調査地:イギリス
目的:会議“London and the First World War”参加のため

- ◇3月13日(金) 国内出張(3月15日まで)
出張者:文学部教授・小林盾
センター特別研究員・大崎裕子
センター客員研究員・見田朱子
調査地:久留米大学 御井キャンパス
目的:数理社会学会大会に参加のため

2014年度運営委員会・所員会議開催の記録

- | | |
|----------|----------|
| 4月18日(金) | 第1回所員会議 |
| 5月2日(火) | 第1回運営委員会 |
| 5月15日(木) | 第2回所員会議 |
| 5月28日(水) | 第2回運営委員会 |
| 7月18日(木) | 第3回所員会議 |
| 7月24日(水) | 第3回運営委員会 |
| 10月3日(金) | 第4回所員会議 |
| 10月9日(木) | 第4回運営委員会 |
| 1月16日(金) | 第5回所員会議 |
| 1月16日(金) | 第5回運営委員会 |

2015年度研究センター構成メンバー

- | | |
|----------|--------------------------------|
| 所長・運営委員長 | 李 静和(法学部教授) |
| 運営委員 | 成道 秀雄(経済学部教授) |
| | 富谷 光良(理工学部教授) |
| | 堀内 正樹(文学部教授) |
| | 金光旭(法学部教授) |
| 所員 | 挾本 佳代(経済学部教授) |
| | 山本 真基(理工学部准教授) |
| | 遠藤 不比人(文学部教授) |
| | 澗 史彦(法学部准教授) |
| 主任研究員 | 田浪 亜央江 |
| 特別研究員 | 大崎 裕子、村上陽子、長谷川明香 |
| 客員研究員 | 趙 貴花、日野 俊彦、藤井 美保子、張 建、
富田 武 |
| 課長 | 神田 昭子 |
| 主査 | 関島 広祥 |
| 事務補佐 | 山中 佐智子 |

CAPS Newsletter No.126

2015年4月15日発行

編集発行:成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549(ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: http://www.seikei.ac.jp/university/caps/